

足女生に是非とも読んでほしい小説

図書館係 阿部健治

6月14日に1・2年生に向けての「性に関する講演会」があった。赤ちゃんが生まれてくる映像を見ながら筆者が思ったのは、「足女生に辻村深月の『朝が来る』を読ませたい」ということだった。

この小説は辻村の代表作の一つで2015刊。第13回(2016)本屋大賞で第5位となった。この年にはフジテレビ系列でドラマ化もされたらしいが、昨年、河瀬直美監督(この人の映像の美しさは特筆もの。樹木希林の遺作の一つ『あん』も素晴らしかった。)の手で映画化された。それをみたばかりということもあって、冒頭の感想を抱いたわけだ。図書係としては小説も読んでほしいが、この映画も是非見てほしいと思う。

この小説には「朝斗」という幼稚園年長組の男の子が登場するが、彼には二人のお母さんがいた。一緒に暮らす「佐都子ママ(映画では永作博美)」と「広島のお母ちゃん」だ。実は「朝斗」は「佐都子ママ」とその夫が「特別養子縁組」(生んでも事情があって育てられない子を、育てたい夫婦が養子としてもらい受ける制度)で迎えた子どもだった。佐都子夫婦は何年にもわたって不妊治療をしていた(筆者はこの小説で初めて知ったのだが、不妊治療って本当に大変。)が、ついに断念しようという矢先にニュースでこの制度のことを知り、結果的に「朝斗」をもらい受けることになったのだった。

「広島のお母ちゃん」は「朝斗」の実母だが、彼女が「朝斗」を生んだのは中学二年生の時。中学一年生で妊娠してしまったのだが、知識も乏しく、気づいた時にはすでに中絶もできない時期になっていた。彼女は「ひかり」というのだが、「ひかり(映画では「蒔田彩珠=まきたあじゅ」という女優が演じている。素晴らしい演技だった。)」の両親も、相手である同級生の「巧」も、更にその両親も出産を周囲に知られることを恐れたため、前述した「特別養子縁組」を仲介する団体「ベビーバトン」に彼女を託すことにした。その結果、「ひかり」は故郷を離れ、広島の小島にある「ベビーバトン」の施設で出産したのである。

故郷に戻った「ひかり」は普通に高校生になったが、事なかれ主義で表面ばかり取り繕っている母親に嫌気がさし(もともと巧と付き合ったのも親への反発からだった)、高校二年生の時に家出をしてしまう。彼女が向かったのは広島だった。「人知れず望まれない子を産む」という「特別な経験」を共にした仲間や、その苦勞を知る「ベビーバトン」代表の浅見(映画では浅田美代子)と一緒に過ごしたいと思ったのだ。

「ひかり」は浅見に温かく迎えられるが、ずっとここで働きたいという彼女の望みは叶えられなかった。浅見は「ベビーバトン」の活動を近々停止しようと考えていたのだ。このような活動にトラブルはつきものだし、経営上の問題も多々ありそうだ。世の中とはそういうものなのだ。

「ひかり」は親にも告げず、首都圏に出て、新聞配達などをして自活しようと試みる。しかし、高校中退の女の子が誰の助けも得ないで生きていけるほど、都会の生活は甘くない。「ひかり」は唯一の仲間だと思っていた同僚の少女に騙され借金を背負わされてしまう。そしてぼろぼろになって、佐都子夫妻の前に姿を現すのだ。

このあたり少しだけミステリーの匂いがあるが、これはあくまで匂いだけのものだ。この後どうなるか、「朝が来る」(「朝が来た」ではない)という題名に含めた寓意も合わせて、この小説の読者自身に確かめてほしい。

辻村深月の作品をもう一つ薦めたい。それは『鳥はぼくらと』という作品だ。第11回(2014)本屋大賞第3位。先月号で「高校生小説」の傑作(覚えてますか。ナンバー1は**恩田陸『夜のピクニック』**ですよ!)をいくつか紹介したが、これが漏れていたことを思い出したのだ。この小説には「**地域活性デザイナー**」という肩書きを持つ「谷川ヨシノ」という人物が登場するが、筆者はこの「地域活性デザイナー」という仕事の特異性に目を瞠った。「谷川ヨシノ」は辻村の他の作品『**青空と逃げる**』や『**傲慢と善良**』(これらも読み応え十分の作品だ)にも登場する、作者お気に入りのキャラクターである。

(話は急に飛ぶが)中島みゆきに『誕生』という曲がある。

中島みゆきというと、『時代』や『地上の星』や、近年は『糸』という曲が特によく知られていると思うが、筆者は数ある中島の名曲の中で『誕生』がナンバー1だと思っている(ちなみに筆者は中島のデビューの頃からのファンで、みゆきファンの生態はわかっているつもりなので、それなりの覚悟は決めてこの発言をしている)ので、皆さんにもこの曲を是非聴いてみてほしいと思う(中島みゆき自身が歌唱しているのは難しいかもしれないが、多くの人がカバーしているので内容ならすぐに確認できるだろう。ちなみに合唱版もあるようで、どこかの中学校で卒業の歌として歌っているなどというのもあった。)

この曲はもとは中島みゆきが工藤静香(キムタクの奥さん)に提供した歌で、最近、NHK-B Sの音楽番組で工藤が歌っているのを久々に聴いたが、歌って戻ってきた工藤が聞き手のリリーフランキーに「とにかく泣かないように気をつけた」と言いながら涙ぐんでいたのが印象的だった。リリーフランキーも話しながら少し涙ぐんでいた。それほど曲である。

人は思春期になると誰でも自意識が強くなり、必然的に傷つく。自分には何の価値もない、などと思ってしまうものだ。そういう人に中島みゆきは語りかける。「Remember 生まれた時」と。

無用感にさいなまれるのは、思春期の君たちに限らない。むしろ、人に迷惑をかける(可能性が高い)老人ならもっとそうだ。しかし、今はそんな存在になり果てたとしても、誰でも生まれた時は、親の、祖父母の、期待を一身に受けて生まれてきたはずだ。だから「だれでも言われた筈」と中島みゆきは言う。そして、「耳をすまして思い出して 最初に聞いた Welcome」と続けるのだ。

人は皆、人の期待に包まれて生まれてくる。人が生まれるというのは本当に特別なことだ。それは奇跡だとも言える。それを決して忘れな。そして、それでももし、忘れそうになったら、「思い出して!」と中島みゆきは歌っているのだ。